よい庭を創るために

——これから庭をつくる人へ——

岸村茂雄

郷愁

（幸福は、時と所とを越えて存在する。）

——少年の頃に読んだヘッセの本の中に、こんな言葉があつたと思う。

この言葉を、ふと、思い出したのは、私の幸福感がどこからきたものか、何から得たものか、と考えたからで、結局、たのしかつた思い出、美しかつた過去、悔のなかつた青春、命いつぱいに生きてきた瞬間、——それらの累積が幸福であり、将来もまたこのように生きようと思う希望が、幸福であると思う。「幸福」は、現在にはない。「現在」と感じる瞬間がすでに「過去」になるからだ。

そして、私が幸福と感じた思い出の多くが、自然を背景としていたようだ。自然を感じながら精一杯に生きたこと、それにあつたようだ。

あなただつて……

あなたが十五か十六七の少年の頃、いや、もつと幼い頃かも知れぬ。

——春、いや、早春ということにしよう。

山の雪も何時しか斑らになつて、町はずれの畑では麦の葉がチカチカ光るように空を指さし、あたりから霜柱のとける音がかすかにみぢみぢと聞える頃——

あなたは、静かな自然に包まれながら、何時までも遠くを見つめたことがあつたにちがいない。

雑木林の梢の先に山脈が連なり、その山脈の上に空の紺青がひろがり、紺青の前を雲の一群がすべる……（雲が大地と大空の中間をさすらうように、私もまた過去と未来の間を漂泊する旅人——）と、少年のあなたは、畑中の小道に立ちつくして、その時の孤独に胸をいためたにちがいない。

そして、雲を見つめてさすらいの心を起さなかつたか。

雲の白さに、未来の夢を托さなかつたか。

現実から大きくはばたいて、山の彼方の未来永劫へつながろうとはしなかつたか。

その頃から、誰もが、人生の旅人となり、おたがいの心の中で孤独な出発を始めたのにちがいない。

それからのあなたが、どんな道程を歩いて、幸福をつかんで行つたか、私は知らない。名誉と富は得たが、美しい思い出を代償とした——それは、私には関係のないことだ。

唯、おたがいに同じなのは、今もなおその時代への郷愁が残つているということだ。

そして、今、庭を作りたいという願望も、畢竟、その郷愁のなせるわざではないか。自然の懐の中から真理の乳房をさぐる本能への郷愁が、今、意識下にあつてそうさせるのではないか。

そして、あなたは庭を作り、その中で遊ぶあなたの子供の瞳に、かつての自分の夢を見つける。

かつて自分が見た白い雲を、そのかたい瞳の中に見るのだ。

現実

はじめて庭を作りたいと考える人が、最初に心配するのは経費のことであろう。一体いくらかかるのだろうか。予想外の高額のような気もするし、また、設計によつてはすつきりと安価に出来ぬこともなかろうとも思う、そこで庭の本を求め、かつては見たいろいろの庭を思いうかべ自分で方眼紙に設計図を描いて、植木屋を呼んで相談したりもする。

が、結局は、植木屋にまかせて施工ということになるのだが、どうも出来上つたものは、自分の夢とは程遠い感じ——しかし、施工した職人も古い職人であるし、請負つた業者も名前が通つているのだから、自分の方が認識不足であつて、やつぱり庭はもつと費用をかけねばならないのだ、とあきらめるようになる。誰でもが、はじめはよい庭を作ろうと真剣に考えるのだが、結果はこのように生ぬるい気持で終るようだ。

これは、依頼主にも責任があるのだと私は思う。よい庭を創るためにはその根本に大きな文化の諸問題があり、計画を樹てる前にまじめにこれと対決しなかつたのではないか、と私は感ずるのである。で、それを取りあげることにした。

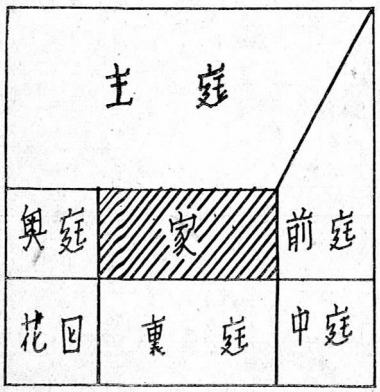
よい庭を創るためには

(一) 時代性をつかむこと

美への直感力は、時代によつて消長があり、同じ民族が同じものを同じ材料で作るにしても、その線の出し方、量への感じなど時代によつてその表現に変化があり、まして庭は生活に結び着いているだけに、その内面における変化は複雑である。

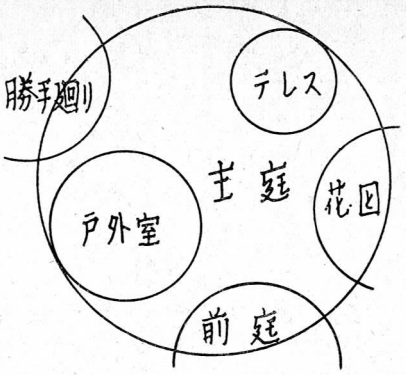
それはさておき、ここでは単に庭の平面的構成の上における近代の変化を述べてみたい。

ごく最近まで、庭は建物を中心にして、前庭・主庭・後庭・勝手廻りの庭などと、各部分の区別をはつきりさせて設計されていた。（第一図）すなわち、それらは個々に



はつきり区劃され、個々の使命を以て構成されていた。

けれど最近は、庭は一つのものとなり、その一部が前庭の役目をし、勝手廻りの庭の役目もして、有機的に活用されるようになつてきた。（第二図）



都会地において庭を作る方は、特にこのことを頭に置いていただきたい。

(二) 庭の目的をはつきりさせること

どんな庭を作るか。まず、はじめに自分の庭が持つ目的がはつきりしなければならない。その目的が、庭園構成の出発点になるからだ。

庭に何を求めるか。どのように庭を使うのか。それを決定するのは、一言でいえば、あなたの人生感だ。あなたの生活だ。

用途を無視して、庭の存在価値はない。生活すなわち庭なのだ。あなたの人生に対する態度が、庭の一生を決めるといえるのかも知れない。

しかし、私がこういうと、ある人はこう考えるかも知れない。

（それは、あまりに実利主義で、日本古来の庭園をも冒瀆する考え方ではないか。生活の中に遊びがあるから潤いがあるので、庭が実用第一主義では、日本の美に背くではないか。……）

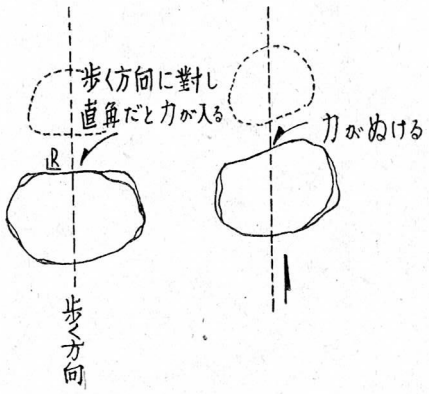
しかし、よく考えてほしいと思う。

「芸術のための芸術。美のための美。」――とは、魅力のある言葉ではあるが、その甘い観念は、庭の世界では一片の理念にすらならないということだ。

庭は、あくまで生活に根を下して構成された一つの形而下の世界で、古美術や骨董ではない。確かに室町時代のある時期の庭園は実用から全く離れているが、それは宗教的需要から起つたもので、禅という信仰生活に結びついた特殊な例なのだ。禅を知らぬ人が、そんな庭を作つたら、生活は不便だろう。庭は、今までの多くの古い職人達が考えていた「美なるもの」と別れて、生活と結びついて来た。そこから、新しい時代の美が生まれはじめた。用途のために何を作るか。これからの職人は、はじめにそれをはつきりつかまなければならない。美くしければ、使えなくてもよい、という時代は去つた。実用という根本的な要素を等閑にして、これからの庭が、正しい生長をしてゆくとは私には考えられない。

飛石にしてもそうだ。若い職人は、親方から千鳥打、雁打ち、二連打、二三連打などいろいろの「型」を教わり、石のなじみを一番の重点として据えるでしよう。そして一日のうちに五つか六つを据えればよい。

しかし、現代ではもつと強い据え方を要求する。つまり、歩くべき線に率直に打つてゆく。それでよいのだ。そして、曲るべきところ、景色のあるところにアクセントをつける。それから、石の大、中、小の形のバランスと、あるところは力をこめ、あるところは力をぬく打ち方（第三図）で、リズムを出すのだ。歩くということに目的を置けば、石が小さい時はひとりでに千鳥型となり、大きければ小堀遠州の飛蝶打になる。



(三) 材料を選ぶこと

設計にそつて、機能と美しさを生み出し、その目的の完成を期するのは材料で、設計が如何によくても苗のような木を植えられたり、光も照りもない石を使われては、庭の価値は全くなくなつてしまう。

ことに造園は、地方的な性質が著るしく、風土によつて大きな変化をうけるから、使いたいものを使うということが許されない。その土地に合つたものを、養成して使う以外にない。交通の発達した現代では供給が迅速になつたが、それでも経済的、時期的にかなりの無理がともなう。

また、材料によつて、強いもの、弱いもの、何時も同じような感じでいるもの、変化のできるもの、あたたかな感じの表現が出来るもの、つめたい感じのもの、重いので運搬費のかさむものなど、いろいろの性質があるから、その取捨選択が大切だ。ことに植物類は根の発育の状態が大切で、その良否があとあとの生育に大きな影響をおよぼす。人が作るというが、結局は、材料が作るといつても過言ではない。

けれど、業界の現状を見るとどうだ。

材料の育成は、ますます等閑にふれてゆく。いや、材料の大切なことは知つているのだが、現代の経済事情の下ではそれが出来ないのだ。大衆は、生活が日々に苦しくなつてゆくので、ひとえに安価なものを求めるようになり、その結果が、業者をして質よりも安価であることを誇るようにし、圃場で育成するよりも山掘りものを右から左へ動かすようにし、業者は、ごまかして売込むことが一つの芸であり、商才であると考える。

これが現代の造園の一番大きな堕落であり、この商業主義こそ現代の造園において一番恐るべき敵なのだ。やはり、庭を作ろうとする一人一人が、材料を吟味する眼を養う以外にこれを救う方法はない。

(四) 技術を尊ぶこと

造園もつまるところ、芸能の一つで、技術がなければ思うようには出来上らない。近頃の建築の雑誌などに画家が構成した近代庭園がみられ、よく素人が作つた庭にもぶつかることがあるが、これはつまるところ娯楽に過ぎない。ある程度の面白いものは出来ても、それを正当な庭園と呼ぶことは出来ない。

庭作りは、なまやさしい遊戯では許されない。一途に専念精進しなければ、技に達することは出来ぬ。技術は、はじめから誰にでも得られるものでなく、修練と、経験と、忍耐強い繰返しと、大きな犠牲とを要求する。芸の世界では、素人たることは許されない。心を捧げ、体を投げ、命を捨てて、家族の犠牲の上に立たなければ、道に達することは出来ない。しかも、不幸にして現代の商業主義は、職人の位置を引下げ、生活を極度におびやかし、その道は狭く遠い。

これからの職人を志す人は、何時も未来を見つめて進むことを忘れてはならない。生きることに情熱を感ずることが大切で、情熱を感ずる時に力が湧き、次第に才能が磨かれる。

私の修業方法をお話することは、その方法は私自身のことであり、人にお奨めすることは無責任に出来ないのでひかえるが、若い人達の精進は蔭ながら何時も祈つている。唯、何時もよいものを見ることは大切で、庭以外の工芸品でも絵でもつとめてよいものを見るようにしたい。それは直ぐには役立たぬが、それらの印象が心の中で堆積していつて、作品の結実に役立つてくれる。よいものにふれなければよさはわからない。むかし、こんなことがあつた。東京にいる私には石の良さがわからなかつた。本を読み、東京の石を見て歩いたりしたがピンと来ない。後楽園や六義園あたりから小石を拾つて来ては、机の上に置いてじつと見つめるのがわからない。寝る時も蒲団の中で抱いてねた。それでもわからない。間もなく京都へ行き、古い庭へ一歩踏込むと、

（あ、石はいい。）

と、涙が出そうになつた。よい石を見なければ石のよさはわからない。

(五) 「作る」のではなくて「創る」こと

時代性を盛り、綿密な計画に基き、よい材料を使い、技術ある職人を呼んで作庭をして、ソツがなくまとまつた庭になつたが、何故が庭に力がない。死んでいる。画龍の点晴が欠けているような気がすることがある。構成がガッチリしているだけに、その欠点が大きく目立つのだ。

それは作品に生命が吹込んでないからで、「作る」ということは生み出すことで、拵えるということではないのだ。そこには、一作ごとに創造が示されていなければならない。作る者が美への開拓をおこたる時、マンネリズムはたちまちにして起り、作品の生命は潮のごとく引いてゆく。

その創造力は何処から生まれるか。

一つは伝統、一つは時代性、もう一つは作者の個性。

美術の歴史をかえり見る時、不滅の作品はいずれもこの三つの要素の上に築かれる。経済の裏づけある時代に天才は育ち、それが伝統を栄養とした場合に、後世に残る作品となる。天才とは、いわば独創人で、彼のすべての価値は独創にある。他人とは異る彼自身の披瀝、すなわち個性の表現が作品の価値となつている。庭においてもこの個性は尊ばなければならない。

以上、よい庭を構成する要素といつたものをのべてはみたが、つくづく一つの庭を創るのも容易ではないと思う。しかし、人生の荒野に生まれて真理の草を見つけるよう運命づけられた人には、一つのよい庭をつくることも幸福の一つにはちがいない。あなたの庭が、よい庭となるよう、祈るや切である。（**雪印種苗嘱託・造園士**）

造園部だより

新春をおよろこび申し上げます。

軒端のつららに春の足音を聴きながら、皆様、御希望に胸をふくらませておられることと存じます。もう、春の計画はすつかりおすみになりましたか。

さて、昨年十二月号でお庭の御相談について一言ふれましたところ、地方から沢山のお便りやら御質問をうけ恐縮しております。なお、記載事項不備のため設計御依頼の方に御迷惑をお掛けしましたこと、重ねてお詫び申し上げます。

〝通信造園〟とは私達の新語ですが、地方の方の庭作りの助言者ともなれたらと考えてのことで、とりあえず次のような方法をとることに致しました。

(一) 建物および敷地の実測図やスケッチを（家の間取り、方位、縮尺、現在ある木の高さ、葉張り、周囲の状況も簡単に記し）送つていただく。また、御職業によつて庭の使ひ方もちがいますので、庭の用途といつたもの、御家族の御希望などもその折にお知らせ下さい。

(二) 造園部では、送つていただいた図面等に基き設計下図を作り、設計実費見積書をそえてお送り致しますから、御面倒でも設計下図に（こちらからの質問事項に対するお答えを）書込んで、設計実費とともに御返送願います。

設計実費はお庭によつてもちがいますが、大体、二千円前後です。

(三) 御返送いただきましたら設計の上、平面図、見取図各々二枚宛を青写真にしてお送り致します。

なお、パーゴラ、アーチ、野外卓、ベンチ等の設計も致しておりますから、御利用下さい。

あなたの夢を具体的に盛つた設計図に基づいて、あなた自身が施工されるのも、人生の一つのたのしみではないでしようか。

（なお、まとまつた施工の場合は、出張監督、出張施工も致します。）